

ポリオ 今秋から不活化「生」接種歴で回数に違い

ワクチン 注意点は



東京都港区の集団接種でポリオの生ワクチンを飲む赤ちゃん(16日、東京都港区役所)

ポリオ(小児まひ)の不活化ワクチンが4月下旬、厚生労働省の承認を受け、今秋から乳幼児への接種が始まる見通しとなった。これに合わせ、現行の生ワクチンの接種は終了する。生ワクチンではごくまれにまひを生じる恐れがあり、近年は接種を控える動きが広がっていた。不活化登場で混乱の収束が期待されるが、過去の生ワクチンの接種歴により不活化の接種回数が変わるため、当面は注意が必要だ。

4種混合 11月にも導入

代表の小山万里子さんは感慨深げに語った。ポリオは口から入ったポリオウイルスが中枢神経を

侵してまひを引き起こし、手足に一生涯障害を残すことがある。日本では1960年ごろに大流行し、多い年には約5600人がか

が当たり前だった接種率は、2011年秋には76%まで落ち込んだ。待ち望まれた不活化導入だが、これまで何が変わるのか。現在、接種は生後3カ月から7歳6カ月未満

原則無料のまま

だが、生ワクチンは生きたウイルスが原料。接種が原因で、100万人に1・4人の割合でポリオ患者が発生した。厚生省は約10年前から、まひを起ささないように化

生ワクチンで2回だった接種回数は4回に倍増する。生後3〜12カ月に、20〜56日の間隔をあけて3回接種し、4回目は3回目の

上腕に皮下注射

生ワクチンは口から飲んだが、不活化ワクチンは上腕に皮下注射する。太ももの外側への接種を勧める専門家もいる。生ワクチンは春と秋に市区町村で集団接種するケースが多かったが、不活化は個人で医療機関を受診する方法が基本で一年中受けられる。乳幼児の予防接種は多くの種類があり、保護者のスケジュール管理が一層重要になる。厚生省は、免疫のない子が増えると流行の危険性が高まるため、今春の生ワクチン接種の対象者は、秋の不活化を待たずに接種するよう勧めている。

ポリオの不活化ワクチンは、シフテリア、百日せき、破傷風の3種混合と合わせて4種混合ワクチンと、単独ワクチンの2種類の準備が進んでいた。このうち、サノフィバステール社の単独ワクチンが4月に承認され、9月1日の先行導入が決まった。

ポリオワクチンの接種

9月1日~
生ワクチン接種歴
0回 → 単独不活化ワクチン4回
1回 → 単独不活化3回
2回 → 不要

11月~
生ワクチン)接種歴 → 4種混合
単独不活化) 0回 → 4回



接種後6カ月以上たつてから受ける。ただし、過去に生ワクチンを1回受けていれば不活化1回分のみなし、残りは3回必要。生ワクチンが2回済んでいれば不活化は不要。これまでに個人輸入で不活化を接種していた場合は、全部で4回となるように残りの回数を調整する。11月には4種混合の導入も予定される。既存の3種混合の接種歴も絡んで対応は複雑に見えるが、厚生省の担当者は「不活化ポリオを計4回分、3種混合を計4回分、それぞれ完了するよう受ければよい」と解説する。最終的に必要回数を満たすなら、保護者の希望や医師の判断で11月以降に4種混合を選べる。8月以降に生まれる子は、4種混合の4回接種に統一される予定だ。